

令和8年4月18日(土)

お早う御座居ます。皆様、今朝は気持ち良く目覚められたでしょうか。春の朝にまどろむ時間は、とても心地良いものです。

まどろみというのは、二度寝、三度寝のようなものです。朝、目が覚めてもまだ起きたくないなと思いながら、また眠ってしまう。起きてもまだ布団の中にいたい。そんな時、無理に起きなくてよい環境があるのは幸せなことです。

西郷隆盛の原稿執筆が佳境に入っていて毎晩遅く眠りにつくのですが、不思議なもので、朝になると目覚めるべき時間には目が覚めます。しかし体の疲れは回復していない。その状態が、2ヶ月ほど続いています。

今月末には、明德出版の社長に原稿を渡す予定ですが、やはり無理に予定を詰め込みすぎるのは体に良くないと感じています。

ですから、西郷隆盛の本が一段落したら、春暁のような穏やかな気持ちで朝を迎えられる時間を作りたい。青木さんの挨拶を聞きながら、そんなことを考えておりました。

さて、今日は「貧」という文字についてのお話です。今日、9時半頃到着し、最初に今日の資料に目を通しました。先程青木さんも少し触れておられましたが、これはトランプ大統領に關係する内容です。後程説明する際、トランプ大統領と日本の高市首相を対比しながらお話したいと思っています。

今日の素読は、国を保ち、家を保つものは・・・という言葉から始まっています。国を保つ時、例えばアメリカを思い浮かべてもよいですし、日本、ヨーロッパ諸国、イランやイスラエルを考えてもよいでしょう。

では、ご一緒に素読を致しましょう。

(全員で素読)

- ① 丘や聞く、国を有ち家を有つ者は、寡きを患えずして均しからざるを患え、貧しきを患えずして安からざるを患うと。蓋し均しければ貧しきこと無く、和げば寡きこと無く、安ければ傾くこと無し。夫れ是の如し。故に遠人服せざれば、則ち文徳を修めて以て之を来す。既に之を来せば、則ち之を安んず。(季氏第十六・1)

② 子曰く、貧しくして怨むこと無きは難く、富みて驕ること無きは易し
(憲門第十四・11)

③ 子貢曰く、貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは如何と。子曰く、可なり。未だ貧しくして道を楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢曰く、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如しとは、其れ斯を之れ謂うかと。子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて、来を知る者なりと。
(学而第一・15)

では、解説に参ります。

① 丘や聞く、国を有ち家を有つ者は、寡きを患えずして均しからざるを患え、貧しきを患えずして安からざるを患うと。蓋し均しければ貧しきこと無く、和げば寡きこと無く、安ければ傾くこと無し。夫れ是の如し。故に遠人服せざれば、則ち文徳を修めて以て之を来す。既に之を来せば、則ち之を安んず。(季氏第十六・1)

「丘や聞く」

丘は孔子のことです。私（孔子）の聞くところによれば、昔の人はこのように言っている、という意味になります。

孔子は、「述べて作らず」という考え方を大切にしていました。これは、自分で新しい思想を作り出して弟子たちに教えているのではありません。新しい事を創作するのではなく、昔の人々が語った内容の中から、良いと思うものを集め、それをきちんと整理して人々に伝えているのです。

この場面の孔子は71歳位で、名前は書かれていませんが、弟子の冉有に向かって話をしています。

「国を有ち家を有つ者は、寡きを患えずして均しからざるを患え」

「国を有ち、家を有つ者」ですが、ここではアメリカを例にして考えてみましょう。トランプ大統領のように、国や事業を担う人々に対して、孔子は「寡きを患えずして均しからざるを患え」と語っています。国民の人数が少ないことを心配するのではなく、不平等であることを心配しなさいという意味です。

これは、中国の問題にも重なります。中国ではかつて一人っ子政策を行った為、人口が大きく減少しました。その結果、このままでは良くないということで二人っ子政策に変え、さらに三人まで認めるようになりました。しかし、それでも人口はなかなか増えない。

このように、国民の数が減ることばかりを問題にするのではなく、本当に心配すべきは社会の不平等だ、ということを孔子は言っているのです。

トランプ大統領で考えるなら、国民の数が減ることを心配するのではなく、国民の所得格差が広がっていることを心配しなければならないでしょう。

大企業や一部の事業は儲かっていますが、中小企業は依然苦しく、富裕層、中間層、貧困層の格差がどんどん広がっていく。そのような状態こそ問題にしなければならない、ということです。

「貧しきを憂えずして安からざるを憂う」

これは、国民が貧しいことだけを問題にするのではなく、社会や政治の面で不公平が広がり、人々が安心して暮らせなくなることを心配しなさい。不公平な社会になってしまうことこそが大きな問題だ、ということです。

「蓋し均しければ貧しきこと無く」

公平で平等な社会であれば、貧困で苦しむ人はいなくなり、皆が平等であれば、極端な貧富の差はなくなる、これは共産主義に通じる発想です。

共産主義は、もともと私有財産を認めず、皆が同じ物を食べ、同じような服を着て、同じような家に住む、全ての人が平等である社会を理想として生まれました。貧富の格差をなくそう、という考え方です。

ただ、いきなり完全な共産主義には進めないで、その前段階として社会主義の考え方が掲げられました。現在世界には5つの社会主義国家があります。

しかし、平等を掲げる社会主義国家であっても、実際には大きな経済格差が存在しています。

「和げば寡きこと無く」

上に立つ者と下にいる人々が和合している状態を意味しています。上下間に隠し事がなく、お互いに信頼し合っている。

「安ければ傾くこと無し」

安ければ（安定していれば）、他国から攻められることも少なくなり、国が滅びるようなことはない、という意味です。

「夫れ是の如し」

世の中はこういうものだと言っています。

「故に遠人、服せざれば」

遠くの国の人々がトランプ大統領の言うことに従わない場合、力づくで従わせようとしてもうまくいかない、ということです。

最近の世界情勢を見ても、非常に荒々しい出来事が起きています。ある国では、夫婦で静かに寝ていた所へ武装した人々が突然押し入り、拘束して連れ去ってしまいました。

ある日突然、遠距離からロケットを発射して国に爆弾が落とされることもありました。しかも、その攻撃は国の指導者や、周囲にいる重要人物達を狙って行われ、攻撃を行った側は、主要人物を排除することに成功した、その国の人々は喜ぶだろう、と考えているようですが、力づくで行ったとしても、本当に良い結果を生むものではありません。

孔子は「遠人、服せざれば」で、そのような力による支配の危うさを示しています。力ではなく、どうすれば人々は従うのでしょうか。

「則ち文徳を修めて以て之を来す。既に之を来せば、則ち之を安んず。」

文化的な政策で相手をなびかせ、従わせたならば、その状態を安定させることが出来ます。

日本はアメリカに戦争で負け、その後、マッカーサーが日本にやって来ました。

以前、山崎先生が「焚書坑儒」について、知足へ掲載して戴きました。中国で行われた「焚書坑儒」では、焚書は書物をすべて焼き捨てることを意味しました。しかし論語まで焼かれては困るので、人々は壁の中に塗り込めて隠しました。そして後の時代になって発見され、論語が今日まで伝わるようになったのです。

当時の中国では、本は全て燃やしてしまえ、そのような学問をしている学者たちも皆殺してしまえ、と大きな穴を掘って埋めることまで行われました。

一方、アメリカが日本に進駐してきた際、書物を焼かず、没収して国民の目に触れないようにする方法が取られました。山崎先生は、当時の状況について書かれた本を持って来られ、それをもとに説明して下さいました。

その中で、日本人に対する当時アメリカ側の考え方は、「日本人は神風特攻隊のようなものを作る国だから危険だ。彼らの誇りを徹底的に打ち砕かなければならない。さもなければ、再びアメリカに向かってきて、今度はやられてしまうかもしれない。だから日本人から魂や誇りを失わせるべき」という発想があったと説明されていました。

では、具体的にどのような政策を行ったのでしょうか。そこで行われたのが「3S 政策」です。これについては以前にも何度か話したので、覚えている方もおられるかもしれません。3S とは、「スポーツ (Sports)」「セックス (Sex)」「スクリーン (Screen)」の頭文字を取ったものです。

まずスポーツについてです。野球は一所懸命に汗を流して取り組むものであり、健康にも良い素晴らしいものだと言われました。当時は、スポーツを通じて爽快感や楽しさを味わえる側面も重視されていました。現代では大谷選手等が活躍し、アメリカで日本人が素晴らしいパフォーマンスを見せることで、日本人は見事だと称賛されています。

アメリカは、汗を流してスポーツに熱中させることで、スポーツの素晴らしさを体感させ、人々に目前の問題から意識をそらせる意図がありました。これは文化の輸出であり、「文徳」にあたります。具体的には、まずプロ野球、特に野球から始まる流れでした。

次に「セックス」についてです。本来、婚姻関係にある男女の間であれば何の問題ありません。しかし、結婚していない男女でも関係を持つ、不倫を推奨するような文化が持ち込まれたのです。

日本でも歴史を振り返れば不倫の話はありますが、珍しい出来事だった為に記録として残ったようです。アメリカ型の考え方では、記録に残る程でなく、もっと自由に男女関係を持てる空気を社会全体に広げようとしたようです。

最後がスクリーン（映画）です。これは、アメリカが誇るハリウッド映画等を観てもらうものです。日本人にアメリカ製の映画を次々と見せることで、アメリカはなんと素晴らしい国なのだろう。自分達もアメリカのような映画を作りたい。アメリカ人のような家に住みたい。アメリカ人と同じように、

様々な娯楽を楽しみたい、と思わせるようにしました。スクリーンを通じてアメリカへの憧れを抱かせ、日本人の価値観やライフスタイルをアメリカに近づけていこうとしたのです。

このように、スポーツ、セックス、スクリーンの 3 つを用いた 3S 政策は、マッカーサーが打ち出した日本人骨抜き政策でした。

「既に之を来せば、則ち之を安んず。」

「既に之を来せば」は言葉通りに考えると、遠方にいる未開の国や異民族の人々、その国の指導者達が中国へやって来るという意味になります。中国へ朝貢し、貢物を持って訪れた際、その国力に応じて相手を認めると考えて下さい。

これで①の説明を終わります。

② 子曰く、貧しくして怨むこと無きは難く、富みて驕ること無きは易し
(憲門第十四・11)

「富みて驕ること無きは易し」

貧しい境遇にしながら、恨み言を言わない事は難しいが、富を築いた時に奢り高ぶらないでいる事は比較的容易という意味です。

お金持ちになった後、周囲に対して謙虚に頭を下げる事は、それほど難しくありません。一方で、貧しくて食べ物にも困っている状況の人が、平気な顔をして恨み言を言わないでいる、これはなかなか出来るものではありません。孔子はそう説いています。

これは、現代にもそのまま当てはまります。自分はお金を沢山持っていると思っているなら、人に対してきちんと頭を下げ、偉そうな態度をとらないようにしよう、という教えとして捉えられます。

政府が打ち出している政策も、これに通じるものがあります。中所得層や低所得層に向けて給付金支給、税金軽減、という支援を行っています。高市さんが掲げているように、消費税を 2 年間減税し、税金を納めることが難しいほど困窮している方には現金を給付、という政策を打ち出したのも、こうした背景があるからでしょう。

「貧しくして怨むこと無きは難く」

人はあまりにも貧しくなり、これ以上無理だ、お金がない、生活が苦しい、中低所得者ばかりが苦しめられる、と不満が大きくなると、テロやストライキが発生し、社会不安に繋がります。政府は、そうした事態が起きると困るので給付金を支給したり、税金を軽減する政策を行うようになりました。

政治家がこの論語を読んで、政策を進めている訳ではないと思いますが、この考え方は、日本の中に昔から根付いているように感じます。

最後③の解説に参ります。

- ③ 子貢 曰く、貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは如何と。子曰く、可なり。未だ貧しくして道を楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなりと。子貢 曰く、詩に云う、切するが如く磋するが如く、琢するが如く 磨するが如しとは、其れ斯を之れ謂うかと。子 曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。諸に往を告げて、来を知る者なりと。

(学而第一・15)

「貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは如何」

弟子の子貢が、孔子にこう尋ねました。子貢は、口八丁手八丁の人物として知られていました。

普通、人は貧しくなると、お金を持っている人や、勤めている会社・組織の中で力を持っている実力者に対して一所懸命機嫌を取ります。諂うとは、おべっかを使う、相手に媚びるという意味です。

子貢は「収入が少なく生活に困っていても、上司や権力者に媚び諂わない。お金持ちになったとしても威張らない。そういう人物を先生はどう評価されますか」と孔子に尋ねたのです。

すると孔子は、「可なり」それは良いことだと答えました。この時、孔子は弟子の顔回を思い浮かべていたと思われます。顔回は非常に貧しく、食べ物にも困るような生活をしていましたが、学問を心から楽しみ、学ぶ喜びを大切にしていた人物です。

「富みて礼を好む者には若かざるなり」

お金持ちになっても礼儀作法を重んじ、態度も正しく、腰が低く、謙虚でいられる人には敵わない。つまり、ただ裕福なだけではなく、礼節を忘れず、

人に対して丁寧で謙虚な人物こそ本当に立派だ、と孔子は評価したのです。

それを聞いた子貢は、『詩経』にある切磋琢磨という言葉がありますが如何でしょう、と尋ねました。すると孔子は、お前は本当にすごいと感心しました。

これまでも子貢は頭が良く、才能ある弟子だと思っていましたが、まさか詩経についても語り合えるとは思っていなかった。孔子は驚き、喜びました。

切磋琢磨は日本でも広く使われていますが、ここでは「切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し」という意味になります。これは、私がこれまで何度もお話してきた内容です。

「子曰く、賜や、始めて与に詩を言うべきのみ。」

賜とは子貢のことです。孔子が子貢に、お前とは初めて共に詩経を語り合えることができるな。お前は過去を教えと、そこから未来を自分で察知することができるからだ。

「諸に往を告げて、来を知る者なりと。」

1を聞いて2を知る。つまり、一つを教えれば、そこから先の事まで察する人だと解説しています。

論語には大変多くの解説が存在します。その中から自分が良いと思うものを見つけ、それを深く読み込む必要があります。ご自身の好きな解説を見つけてみて下さい。

今年は「乱高下の年」になると、『知足』にも書かせて戴きましたが、1月頃から、今年は何が起きるか分からない、大きく揺れ動く年になると話してきました。実際、トランプ大統領の言動によって世界全体が振り回されている状況で、こうした流れは今後も暫く続くでしょう。

これまでも、自分たちの言いたいこと、やりたいことを強引に進める国はありました。今は、それがさらに加速しています。ロシア、中国、北朝鮮に加え、アメリカまでもがそうした動きを始めたことで、それなら自分たちもやってよいという形で、各国が動き始めています。

現実にはイスラエルとイランの関係を見ても、イランはやられたからにはやり返さなければ、という流れになっています。

世界全体を見渡すと、ならずもの国家が次々に現れ、昔の弱肉強食の世界へ向かう流れに入りました。

そうした中で、私たちは何をしなければならないのか、どのような備えをしておくべきなのか。それを前提にして、今後の行動を決めていかなければならないでしょう。

中国は台湾を攻める、攻めると言いながら、軍事力をどんどん強化してきました。それを進めるためには、軍の中に習近平氏の側近がいて、習近平氏が言っている事に皆従わなければならないと動かす幹部が必要になります。

ところが、習近平氏腹心の部下たちが軍から次々に粛清され、殆どいなくなってしまうました。それを見て習近平氏は、自らが率いる軍の上級幹部達を拘束し、牢屋に放り込む対応をしたのです。結果、習近平氏は今の地位を維持しています。

表面的には笑顔を見せていますが、なんとか国家主席としての立場を維持している状態です。それが今後、習近平が何をするか分からないと言っている理由です。

ならず者国家という言葉がありますが、現在の中国はまさにそのような状態に陥っていると言えます。

一方で、アメリカのトランプ大統領もホルムズ海峡は自国のもの、グリーンランドも我が国の領土だといった強気の主張を次々と打ち出しています。しかし、それらの政策は必ずしも思うようには進んでいません。

自分の主張が思い通りに通らないと、すぐにまた別の主張を繰り返す傾向があります。こうした「発言しては軌道修正する」という場当たり的な姿勢が繰り返された結果、周囲からの信用は徐々に失われつつあるのが現状です。

今やアメリカは信用できないという見方が強まっており、国力の低下も指摘されています。もしアメリカが完全に衰退してしまえば、中国で毛沢東が行ったようなことを、同じようにやりかねないでしょう。

嘗て中国の毛沢東は、自らの権力が失脚寸前まで追い込まれた際、若者たちを扇動して「紅衛兵（こうえいへい）」を結成させました。そして、自らの政敵を次々と捕らえ、殺害や監禁、農村へ強制移住させるという暴挙に出たのです。このように、独裁的な手法で国を率いてきた人物が行き詰まったときには、常識では考えられないような手段に打って出ることがあります。

トランプ大統領も同様に、今後の政策が行き詰まれば、今度は同盟国に対

して理不尽な要求や揺さぶりを次々と仕掛けてくる可能性が十分にあります。

世界情勢は一触即発の段階に入りつつあると言っても過言ではなく、不穏な空気を感じます。

〈恒例の質問〉

緊迫した情勢を横目に見つつ、恒例の質問に参ります。気づけばもう4月ですね。本当に月日が流れるのは早いものです。今回もいつも通り、ご自身の主観で率直にお答え戴ければと思います。

○今年良い日が続いておられる方

○嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方

○有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方

○身体の手入れをよくやっていると思う方

○自分磨きをよくやっていると思う方

○昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

話を日本に戻しましょう。先日、東京フォーラムで元朝日新聞の西谷さんも出席されていました。

普段、私は様々な新聞記事を紹介する際、いつも最後に朝日新聞を持ってきました。失礼ながら、最近の朝日新聞にはあまり紹介したいと思える記事が見当たらないからです。ところが、先日の東京フォーラムの際、非常に興味深い記事を見つけましたので、真っ先に朝日新聞を取り上げました。

朝日新聞には多事奏論というコラムがあります。執筆者は自分の顔写真と名前を堂々と掲げ、なかなかの言いたい放題を繰り広げているのですが、書き手は編集委員です。

読んでみたところ、出だしが実に秀逸でした。執筆者は高橋純子さんという方で、冒頭にこうあるのです。高市首相に聞きたいことがある。あなたは何のために、どうして首相になったのですか、と。続けて、これほど姿が現れない首相は前代未聞だろうと書かれていました。

「現れない」の真意が面白いのです。具体的に、あなたは石破茂前首相と比べて、国会審議に出席する割合が、4分の1しかありません、と書かれていました。

さらに記事は、首相のメディア対応の姿勢についても鋭く言及しています。高市首相は、ぶら下がり取材や正式な記者会見を殆ど開こうとしません。メディア側が本当に聞きたい重要な局面では何も語らないのです。一方で、自分がアピールしたい事柄があるときには、SNSなどで自ら積極的に投稿を行います。自分の言いたい事だけは一方的に発信し、メディアからの突っ込んだ質問には一切応じようとしない、という訳です。

加えて、国会の集中審議にも一向に姿を現しません。その出席回数は、過去の首相と比べても断トツで少ないのです。一体、何をやっているんだと批判や文句が書き連ねられています。

朝日新聞もたまには面白い記事や、面白い記者を載せるものだと、強く印象に残りました。

その場に元朝日新聞の西谷さんがいらしたので、高橋純子さんは、どんな方なのですか？と尋ねてみたところ、ちょっと変わっている人だと教えてくれたのです。

大手新聞社ともなれば社員数も多い為、全員が互いを知っている訳ではありませんが、西谷さんは定年退職後に朝日新聞子会社の社長を務めておられ、そこで色々と独自の文章を執筆して発信していたそうです。

それを目にした高橋さんが、何やら面白いことを書く人がいると興味を持ち、すぐに西谷さんへ直接電話をかけてきたというのです。実際に話してみた西谷さんも風変わりな人だという印象を受け、後から社内の評判を聞いたら、社内でも少しちょっと変わった人として広まっていることが分かったのだそうです。

こうしたエピソードに触れると、新聞社も少しずつ変化してきていると感じます。

さて、先程お話した中国やトランプ大統領の振る舞いは、まさに恫喝にほかなりません。彼らは常に、圧倒的な圧力をもって周囲を思い通りに動かそうとしているのです。

世界が混乱している、おかしい方向へ向かっていると話をしているのは、最終的に昭和21年2月17日を忘れず、ぜひ調べてみて欲しいという話に繋がりたいからです。

トランプ大統領は、日本を見るとなぜ真珠湾を攻撃したのかという話を持ち出します。彼は表面しか見ていないので、真珠湾の話を出せば、日本が謝

るだろうと考えているのではないか、という気がします。

日本人の中には、アメリカが真珠湾攻撃するよう仕向けたのではないかと考えている人も、今尚います。

そうした状況を踏まえると、これからの日本にとって重要なのは、単に真珠湾の話ではありません。現在の世界情勢で、またマッカーサーのような存在が現れる可能性があります。たとえそのような人物が現れたとしても、現時点では、まだ日本にとって直接的脅威にはなりません。

日本人として本当に怖いのは、昭和 21 年 2 月 17 日に起きた事態がまた起きる事です。ある日突然、銀行が封鎖され、自分たちが預けているお金が凍結される可能性があります。多くの人が持っている現金、紙幣や硬貨も使えなくなる。さらに、カード類も利用できなくなり、食べ物も十分に行き渡らなくなる。それが 2 月 17 日に実際起きた事です。

自然災害が再び起きることは、ある意味で目に見えているとも言えます。特に今は、噴火に関する話題も増えています。地震、津波、噴火等が、今後起きる自然災害として想定されます

既に世界は戦争の時代に入っており、日本もまた、その流れに巻き込まれています。問題は、それがいつ自分自身の生活に直接影響してくるかです。

その感覚を理解するには、茹でガエルの話が分かりやすいと思います。緩やかな環境の変化や危機には気づきにくく、気づいたときには致命的な事態に陥っていることを戒める寓話です。

今後は地震や津波、噴火といった自然災害への警戒が必要です。日本は、すでに認知戦という形で戦争に巻き込まれています。このような複合的な危機を見据えると、日本人が食料を得られなくなる未来も、決して人ごとではないと考えられます。

中国側が「首を切り落とす」という過激な表現をしたことで、かえって中国の野蛮さを印象づける結果になったとも言えます。中国内でも、少しずつ習近平氏のコントロールから外れる人が増えている印象を受けます。

世界全体を見渡せば、大国が周囲の国を征服して連合体を作る動きは、歴史の中で繰り返されてきました。盟主の力が衰えると、ソ連が解体した後連合体になった時のような変化が起きます。ロシアがソ連時代の栄光を夢見るのも、中国が大中華帝国の姿を取り戻すために連合国家を作ろうとするのも、歴史を振り返れば元に戻したいという自然な心理なのかもしれません。

日本では都道府県ができる前、江戸幕府のもとで各大名が其々独自の自治権を持って国を治めていました。歴史上最近まで、徳川幕府はそうした統治を行っていたのです。その為、日本が再び江戸時代のような統治形態に戻っていく可能性は非常に高いと考えております。

歴史を振り返ると、明治維新期の動きは非常に興味深いものがあります。当時、徳川幕府に肩入れした国もあれば、薩摩藩や長州藩に肩入れした国もありました。

徳川幕府に対しては、主戦論者であった小栗上野介の存在もあり、外国勢力が強く働きかけを行いました。中には徳川慶喜に直談判した国もあり、「幕府に多額の資金を融資するので、そのお金で我が国が製造している大砲や軍艦、機関銃等を買って欲しい。その武器で薩長を打ち倒せばいいだろう」と持ちかけたのです。

しかし徳川慶喜は、自分たちの力で国内を治めるので、好意は有難いがお金は借りないと断りました。明治新政府の発足後、結果的に新政府はお金を借りましたが、幕府が滅びる前は外国の金で敵を叩けという誘いに対して、ノーと言い切ったのです。

薩摩藩についてはどうでしょうか。薩摩藩を代表する人物といえば、島津斉彬でも久光でもなく、やはり西郷隆盛です。

西郷さんは、「あなた方のところにお金を貸してあげるから、そのお金を使いなさい。武器や弾薬もどんどん渡すから、それを使って徳川幕府を一気に滅ぼしなさい。私たちはあなた方を応援しますから」という話に対して、即断しています。

奇しくもここで申し上げたかったのは、薩摩藩・長州藩、そして徳川幕府も、外国から力を貸すと言われたものの、どちらも断ったことです。当時の日本人が外国の力は借りず、自分達だけで日本を治めますと断ったのは素晴らしい話だなと思いながら私は現在、西郷隆盛の本を出版すべく、原稿に取り組んでおります。

日本は自主性を持ち、各地域の人々は其々の特性を生かして今後に備えましょう、ということで本日は終了とさせて戴きます。有難う御座居ました。